日野原重明

4、5月は親交のある韓国のテノール歌手、ベー・チェチョルさんの日本公演が大阪、東京、名古屋であり、私は演奏の前の講演者として、各所へ応援に駆けつけました。以前もご紹介しましたが、チェチョルさんは甲状腺がんで失った声を、日本人の医師、一色信彦さんの手術によって見事に取り戻した「奇跡のテノール歌手」です。

5月中旬は愛知県芸術劇場コンサートホールでの公演でした。チェチョルさんは熱心なクリスチャンで、公演は讃美歌「輝く日を仰ぐ時」で始まります。声帯手術中、もし声が戻ったら、いつも公演の初めにこの讃美歌を歌おうと決めていたそうです。チェチョルさんの復活を喜ぶ気持ちがあふれ、神様の存在を間近に感じるようでした。

アンコールの最後は、私が作詞、作曲した「愛の歌」でした。20年ほど前、ホスピスで病む人の傍らで、静かに見守るボランティアの人々の姿を詩にしたのでした。

「我らいまここに　心を合わせ　善き業のために　この時を過ごさん　愛の手を求めるその声に応えて　いとしみの心　人々に贈らん　我らいまここに　力を合わせ　報いを望まで　奉仕にぞ生きなん　捧げる喜び　心にぞあふるる　愛するあなたに　愛をば贈らん　愛をば贈らん」。私は壇上に促され、チェチョルさんは私の手を取って歌いました。嵐のような拍手が鳴りやみませんでした。

4月下旬には、大阪のザ・シンフォニーホールでも公演がありました。このホールの総監は、滋慶学園グループ総長の浮舟邦彦氏です。浮舟氏は私が約20年間、共に医療秘書の養成に取り組んで来た人物で、今回の公演で偶然お会いし、総監を務められていると知り、人のつながりの妙を感じました。浮舟氏から、このホールは歌手がマイクを使わないでもピアニッシモを響かせることができるよう、精巧な仕組みがあると伺いました。

チェチョルさんを手術した一色先生も登壇しました。1930年のお生まれで、患者がいる限り今後も声帯の手術を続けたいと語っておられました。チェチョルさんの歌声はこの日も素晴らしく、私は音楽が起こす奇跡、医療が起こす奇跡を確かに感じたのでした。

（聖路加国際病院名誉院長）